

女性が拓く未来のテクノロジー ～Women in Engineering 2016～ 開催報告

IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group
2016/10/31

2016年10月15日（土）、IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group (IEEE JC WIE) は、中央大学との共催で「女性が拓く未来のテクノロジー Women in Engineering 2016」を開催した。本イベントは、内閣府男女共同参画局、日本MOT振興協会、日本経済新聞社、情報処理学会、日本データベース学会、UN Women日本事務所、文京区が後援として、70名（IEEE会員22名を含む）の参加者が集まった。



会の進行は、JC WIE の時岡綾が務めた。当日のプログラムおよび講演内容は以下のとおりである。

<http://www.ieee-jp.org/japancouncil/affinitygroup/WIE/20161015/>

冒頭に、共催の中央大学 加藤俊一副学長より開会挨拶、IEEE JC 理事の津田俊隆先生より来賓のご挨拶をいただいた。次に、JC WIE Chair である矢野絵美より、IEEE JC WIE の紹介と、共催である中央大学のリケジョ応援プログラム WISE Chuo の取り組みについて紹介があった。



その後、パネルディスカッションと2件の技術講演が行われた。

【パネルディスカッション】「災害に強い街づくり ～技術系女性の視点の活かし方～」
須田 久美子（鹿島建設株式会社）× 成澤 廣修（文京区長）× 橋本 隆子（千葉商科大学 / IEEE WIE International Chair)

まず、「ドボジョの活躍で土木の100年を支える」と題し、須田久美子氏よりオープニングトークがあった。須田氏は土木に関わる仕事がしたいという強い思いからゼネコンに就職した。

最初は、女性は現場に出してもらえなかったことができず研究所等で長く働いたが、違う部門を経験したいと上司に希望を伝え、現場への異動を果たし、以後東京3環状に関わる仕事をされている。

現在、2030（にいまる さんまる：2020年までに指導的立場で働く女性を30%に）という政府目標があるが、土木の分野での女性＝ドボジョの数は少なく、土木に関わる女性技術者は現在約2.5%程度に留まっている。須田氏は、このような現状を打破するため、土木の魅力を女性学生に伝えたり、後輩女性土木技術者を支援することにも積極的取り組んでおり、社内での活動だけでなく、土木技術者女性の会等でも積極的に活動され、ロールモデルとして大きな役割を果たされている。ご自身のこれまでのキャリア、社内(鹿島建設)での活動、土木技術者女性の会の活動など、ドボジョの力強い活躍を紹介され、最後に、仕事を続けるためには、「好きなことを見つけて仕事を楽しむ、仕事として続ける、目標を設定する、夢をあきらめない」という力強いエールでオープニングトークを締めくくられた。



オープニングトークに続き、橋本隆子氏のファシリテートの下、成澤廣修文京区長と須田氏によるパネルディスカッション「災害に強い街づくり ～技術系女性の視点の活かし方～」が行われた。

成澤区長からは、現在文京区で働くドボジョの活躍の紹介と、災害に強い街づくりの一環として文京区が実施している、災害時の妊産婦・乳児救護所の開設の紹介があった。社会基盤作りに女性が関わるメリットは何かという点に関して、「土木技術そのものについては男女の差はないが、近隣住民とのコミュニケーションがスムーズに行く」（須田氏）、「女性技術者が増えてから住民との調整、スピードが早まった」（成澤区長）とのこと。女性のコミュニケーション力等が土木の現場を変えている現状が紹介された。また、災害時に女性の視点をどう役立てるか、という点に関しては「自分の地域のことは自分で考えるという姿勢が男女問わず重要である」（須田氏）、「東日本大震災後、一斉帰宅の抑制対策が進められており、災害時にはむやみに職場から家に帰ってはいけないということになった。そうすると、地域にいるのは自宅外に職を持っていない女性と子供と高齢者ということになり、女性が避難所運営をすることになる。女性の視点が重要になる」（成澤区長）との意見が出された。



また、会場からは「2030という目標を掲げられても現状ではそもそも女子学生が30%に満たない状況で何か良いアイデアはないか」という質問があった。須田氏からは、「職業の選択には父母の意見も大きいので、父母の理解が大事である。ロールモデル集をネットで公開するなど情報発信が大事であると考え、そのような試みを土木技術者女性の会等で行っている」と紹介があった。成澤区長からは「男性がどう役割を果たすかも重要であり、イクメン・イクボスのロールモデルが必要と考えている。また女性活躍のロールモデルに関して、入り口で無理と思わせるようなロールモ

デルだけの提示はマイナスであり、新しいロールモデルをWIEから作ってほしい」との意見が出された。

最後に、「ドボジョになると、出来上がってからでは見られない場所を見ることができる！ドボジョを目指して！」（須田氏）、「女性が働きやすい、区役所、市役所という場での技術者としての道もあるので選択肢に入れてほしい」（成澤区長）との会場へのメッセージでパネルが締めくくられた。

【技術講演】「モバイル型ロボット電話「RoBoHoN」商品化について」 景井 美帆（シャープ株式会社）

シャープ（株）が2016年5月に発売した、モバイル型ロボット電話「RoBoHoN」の事業・商品企画について、開発チームのリーダーである景井氏より、製品開発における技術的な内容とご自身の実体験ややりがいを含めたご講演をいただいた。

特に商品化できたポイントとして、①主要メンバーの熱意 ②プロトタイプを作成・受容性の検証 ③トライ&エラーの開発 ④社内上位層の意思決定 ⑤施策実施における権限移譲 ⑥ロボットクリエイター高橋氏の存在の5点について紹介があった。



【技術講演】「サイバー脅威に対して私たちができること ～標的型メールから女性ハッカーの育成まで～」 鈴木 悠（株式会社ラック）

サイバーセキュリティ関連の様々なサービスを提供する（株）ラックの鈴木氏より、近年増加している人の脆弱性を狙った攻撃・被害の脅威について説明があった。特に「話術や盗み聞き・盗み見などを利用し、人間の心理・行動の隙をつくことで情報を不正に取得する手段」であるソーシャルエンジニアリングについて、具体的な海外事例をもとに紹介があった。さらに、会場に対してサイバー犯罪に巻き込まれないためには、「インターネット上に公開する情報に注意する」「サイバー脅威、セキュリティを知る」ことの重要性が説明された。最後に、このようなサイバー攻撃に立ち向かう女性ハッカーを育成する取組み「CTF for GIRLS」についても紹介があった。



第1部の締めくくりには、UN Women 日本事務所の福嶋佳代子所長から、女性活躍を応援する多面的な取り組みのご紹介をいただいた。

【ラウンドテーブルトーク】

8つのテーブルに分かれて、参加者全員で議論する時間を設けた。各テーブルでのテーマとファシリテータの一覧を表1に示す。

学生から社会人まで様々な年代の参加者が、分野を越えて自身の経験をもとに意見を交換した。さらに、女性だけでなく男性もディスカッションに加わることで多様な視点でのディスカッションができた。

表1 ラウンドテーブルトーク テーマ

	テーマ	ファシリテータ
A	女性エンジニアの活躍の場を切り開くには？	須田 久美子（鹿島建設株式会社）
B	新規プロジェクトを推進していくには	景井 美帆（シャープ株式会社）

C	女性エンジニアを増やそう！」	鈴木 悠 (株式会社ラック)
D	ノンネイティブのためのグローバルリーダーシップ	橋本 隆子 (千葉商科大学)
E	多様性を生かして活躍するには	加藤 俊一 (中央大学)
F	リモートワークで仕事を効率的に	望月 理香 (NTT)
G	キャリアとワークライフバランス	松永 知代 (日本アイ・ビーエム株式会社)
H	パラレルキャリアのすすめ	矢野 絵美 (リコーIT ソリューションズ株式会社)



A. 「女性エンジニアの活躍の場を切り開くには？」 須田 久美子 (鹿島建設株式会社)

須田氏のリードにより、他社会人 3 名、学生 5 名でディスカッションした(全員女性)。学生が多かったため、学生の質問に社会人が答えるという形式で、社会に出てどう活躍するかヒントを見つけられるよう、皆で話し合った。「女性らしさが役に立ったことは?」「男性の中で仕事を続けていくためのコツは?」「今の職業について良かったと思う瞬間は?」「仕事や会社をどのようにして選んだ?」など、社会人は日頃意識していない新鮮な質問や、未だ男性中心の社会に出ることを前にしての率直な不安を背景にした質問が多数出された。学生には先輩の意見を聞く良い機会になるとともに、社会人にとっても自分の職業人生を振り返る良い機会になった。女性のネットワークを作り、夢を持ち続け、健康第一でがんばろう、と皆で励まし合った。

B. 「新規プロジェクトを推進していくには」 景井 美帆 (シャープ株式会社)

新規プロジェクトを立ち上げるために重要なことは何か、そして立ち上げただけでなく継続するために必要なことは何かについて議論した。

新規プロジェクトは確実性や予測ができないため、可能性のアピールが重要である。決定権を持っている人と二人三脚でプロジェクトを進める、お願いできる関係になっておくなど、普段からのコミュニケーションにより、可能性を高めることができるのではという結論になった。一度立ち上げたプロジェクトの継続するためのメンバーのモチベーションの維持や、日本と海外の文化の違いなどについての話題も挙がり、トークメンバー同士、現在の環境や過去の経験のシェアを行いながらの議論だった。

C. 「女性エンジニアを増やそう！」 鈴木 悠 (株式会社ラック)

このグループのメンバーには海外生活経験者が多い事が分かり、海外での女性の社会進出についてまずは焦点があてられた。まだまだ海外でも女性進出は少ないところが多いとの意見が多数であった。そして、女親は娘に理系に行って欲しいという意見が多いのに対し、男親は娘に理系に行って欲しくないという意見が多い傾向があるとの意見が出た。女性がエンジニアとして頑張るなかで大変な部分も十分に見ているため、男親は自分の娘にそうはなって欲しくないという事であった。女性が社会に進出しやすい世の中を作るためには、まずは親の意識を変えることが必要である。

いくつかの議論がつづき、上記に加えて、女性のグループを女性が批判することなくお互いに協力していくこと、アメリカにある暗黙の協ルールなどを学び日本でも積極的にそういうスタイルを取り入れていくことなどが大事であるという結論に至った。

D. 「ノンネイティブのためのグローバルリーダーシップ」 橋本 隆子 (千葉商科大学)

参加者は8名、大学1年生からシニアエンジニア・研究者まで、また日本人だけでなくインド人、中国人といった多彩な顔ぶれだった。グローバルにリーダーシップをとるには、相手を尊重すること、理解すること、自分(日本)や相手の文化や状況を知ることが重要であるとの意見が出た。また、今の若者は自分が傷つきたくないという思いが強く、留学やグローバルなコミュニケーションに二の足を踏む状況がある。英語教育を含め、そこを改善していく必要があるといったことが議論された。参加者それぞれが意見を十分に出し合った、大変活発なトークとなった。

E. 「多様性を生かして活躍するには」 加藤 俊一 (中央大学)

“多様性”について議論を進めていく中で、「多様性＝女性」という単純なものではなく、本質は、「自分の持ち味を保ちながら、いかに相手を受け入れられるか」であるという認識を持っている参加者が多くいた。グループ全体では、自分の価値観と異なる考えを受け入れるのは容易ではないが、異なる価値観を拒絶せず、議論の視点を変えるなどしてお互いの共通事項を見つけることが、多様性を活かした活躍に繋がるのではという意見で纏まった。

F. 「リモートワークで仕事を効率的に」 望月 理香 (NTT)

まず、望月氏の周囲での利用状況をご説明いただいた。利用上の重要な点は以下の2点であった。コミュニケーションや予定共有、仕事の優先順位付けにより、リモートワークのデメリットを最小限に抑えること。上司や周りの理解、および環境作りにより適切な労働管理がされること。参加者からは「メールの増加は見落としに繋がるため情報の共有方法を変えたい」「顧客と深夜までメールのやり取りが生じ長時間労働に苦勞している」との声が上がり、日本人の考え方の改善が不可欠との話になった。

また、望月氏から、共働き家庭に不可欠である協力的な旦那も徐々に増加していると感じること、リモートワークによる介護離職の抑止効果は感じられないことを伺った。親の介護が生じる年齢では専門性が高く、仕事を数人で分担しづらいため、辞めてしまうのではないかと、との話もあった。リモートワークは新しい柔軟な働き方として浸透してきているが、根本的な問題は多く残っていることを確認した。

G. 「キャリアとワークライフバランス」 松永 知代 (日本アイ・ビーエム株式会社)

松永氏のリードで、他に社会人4名、学生3名(学部1年、2年、修士1年)の計8名でディスカッションした(男性は1名)。

結婚、出産、育児、介護など人生のステップに応じて働き方を変える必要がある。今は良い対応をする会社も増えてきたので、学生さん達は会社選びの際によく調べると良い。結婚、出産等は準備期間があるが、介護は突然訪れるので、対応が苦しくなることも多い。

学生時代に学んだことを直接仕事にできるとは限らないが、仕事に活かせる学びは多い。社会人になってもスキルを上げ、自分の強みをもてば、ステップアップできるとの、先輩達からのアドバイスがあった。

H. 「パラレルキャリアのすすめ」 矢野 絵美 (リコーITソリューションズ株式会社)

「パラレルキャリア」について、自分が所属している会社の中だけでなく、学会やNPO等での活動を通じたキャリア構築というものもあるのではないかとという提案がファシリテータの矢野氏からあった。参加者からは、学生と企業のマッチングについても、日本の特徴的な就職活動のやり方では十分であるとは言えず、もっと学生と社会人が直接会話できるような場が必要であり、何かアクションを起こしていきたいという話が出た。学生・若手技術者、女性たちがキャリアを積むために必要な環境づくりに向けて、この場の議論で終わらずに連携して行動を起こしていこうという話になった。

最後に、JC WIE の野田夏子事務局長より閉会挨拶が行われた。

【集合写真】



以上